



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾

薬剤師の新しい職能を拓くバイタルサイン

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

「バイタルサイン」というテーマが 薬剤師に広まりつつある3つの理由

みなさま、こんにちは。狭間研至です。今月から装いも新たに連載をスタートいたします。どうぞよろしくお祈りします！

昨今は、薬剤師とバイタルサインというテーマは、流行とも呼べるような勢いで広まりつつあります。その背景には、私は以下の3つの理由があると考えています。

1) 薬局・病院での薬剤師活動が限界に達しつつある

外来患者さんがお持ちになる処方せんを応需し、迅速・正確に調剤し、適切な服薬指導を行った上で正確に薬歴に記載するという薬局業務。また、外来処方せんの調剤や、病棟での薬剤管理業務がほとんどを占めるという病院業務。これらは、業務の拡大に伴って、いずれも業務や教育のマネジメントやリスクマネジメントが必須の事項となりました。過去30年間の医薬分業の進展、医療技術の進歩の中で、その質はどんどん高くなってきましたが、もう限界に達しつつあります。

2) 薬学教育6年制時代にふさわしい薬剤師のあり方が求められている

薬学教育が6年制に移行したということは、従来とは異なる医療職が育成されるということになります。すなわち、処方せん調剤業務や薬剤管理業務をいかに高品質なものにするか、という考え方では辻褃が合わなくなるということです。

3) 少子超高齢社会を支える新しい地域医療モデルが求められている

高度経済成長を遂げていた人口増加社会時代のわが国で作られた現在の医療スキームは、その保険制度も含めて抜本的な変革が必要であることは誰しも考えていることです。高齢化率が23%に達した今、具体的

な新しい地域医療モデルが必要とされています。

これら3つのことを考えると、私は薬局・病院を問わず、「薬剤師の新しい職能」が求められていると考えてきました。このことは、現在では総論としては広く認識されつつあります。しかし、その新しい職能とは何か、という各論になると、少しわかりにくくなるのではないのでしょうか？

患者から処方せんを受け取るより前から 薬剤師の重要な仕事は始まっている

私は「処方せんを受け取ってからすべてが始まるという職種ではない」という認識を持つことがヒントになるのではないかと考えています。もちろん、初診の処方せん調剤の患者さんはそうなります。しかし今、多くの患者さんは、数年にわたって通院されている患者さんや、在宅で療養されている方です。これらの方については、かかりつけ薬局を持つという流れが定着しつつある現在、前回の処方によって調剤したお薬が薬歴に残っていますし、そもそもその調剤はその薬局の薬剤師が行ったものです。つまり、前回処方の妥当性を薬剤師が検討し、必要に応じて適切な処方提案を医師に行っていくということも、重要な仕事になりつつあるということです。

外来通院患者さんでは、医師への情報提供ということで次回からの処方変更になりますが、在宅患者さんや入院中の方の場合には、医師が次回の処方せんを発行する前に評価し、医師にフィードバックすることが可能になるはずで

バイタルサインは、その評価・アセスメントのツールに過ぎないということ、そして、新しい薬剤師の職能を拓くためのきっかけとなりうるということ、是非、ご理解いただきたいと思います。